

絵本と音楽を融合した実践発表における一考察 — 絵本『おぼけのコンサート』を用いて —

長島 佳奈*

2024年12月26日受理

I. はじめに

1. 研究の背景と目的

『幼稚園教育要領』および『保育所保育指針』で示されている領域「表現」では、複数の表現領域を結びつけて表現活動を行うことが、子どもの豊かな感性や表現力を養うために重要であるとされている。平成29年改訂の『幼稚園教育要領解説』における領域「表現」の内容には、「感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。」と示されており¹⁾、その解説には、「教師は、表現の手段が分化した専門的な分野の枠にこだわらず、(中略) 幼児が表現する喜びを十分に味わえるようにすることが大切である。」と記されている²⁾。この領域「表現」における子どもの表現活動には「造形表現」「言語表現」「音楽表現」「身体表現」があり、これらを相互に関連させた表現活動を子どもたちが楽しむための環境を整えることが必要である。

昨年度、この複数の表現領域を結び付けた試みとして、O短期大学の保育士資格選択必修科目「子どもの音楽表現Ⅰ」において、絵本『もりのおふろ』(西村敏雄作・絵/福音館書店2010)と『きょだいなきょだいな』(長谷川摂子作・降谷なな絵/福音館書店1994)を題材に音楽創りをし、保育園で実践発表をした。これらの絵本を用いた音楽創りでは、鍵盤楽器や打楽器、手作り楽器を用いて、物語に沿った音や音楽を創り、また、何度も繰り返し出てくる台詞には、言葉の抑揚や子どもたちが歌い覚えやすい音域も意識しながら旋律を創った。実践発表の終了後に、保育現場の保育者を対象にアンケート調査を実施した結果、絵本と音楽を融合することは、絵本の物語の世界観をより深く描き出し、子どもも大人も想像力や音への興味関心を高め、さらには保育者の保育活動における可能性を

広げる機会となるものとして有効な手段であることが明らかになった。

そこで、本稿では、昨年度に引き続き絵本と音楽を融合した創作活動を授業で行い、それを保育園にて実践発表することを通して、「音楽絵本」の可能性や効果について検討することを目的とする。なお、本稿では、絵本と音楽を融合して創作した教材を「音楽絵本」と定義する。

2. 研究方法

2024年度の授業科目「子どもの音楽表現Ⅰ」を通して、学生の「音楽絵本」の創作活動の様子、保育園における実践発表の様子、実践発表後の振り返りシートの記述内容、また、保育者を対象としたアンケート調査の結果をもとに、「音楽絵本」の具体的な効果について検証する。

II. 授業実践

1. 授業の概要

「音楽絵本」の創作活動は、2024年7月～9月開講の2年生対象の保育士資格選択必修科目「子どもの音楽表現Ⅰ」における教材研究の一つとして実施した。O短期大学保育者養成課程2年生9名(女9名)が受講し、第1回目はプログラム内容の考案、第2回目から第6回目で創作活動をし、第7回目にて実践発表、第8回目で活動の振り返りを行った。

倫理的配慮に関して、学生には、振り返りシートの記述内容は授業評価に影響しないこと、個人情報に関する事項については明かさないことを伝えており、初回の授業時に一連の取り組み内容とその成果について論文として発表することの了承を得ている。

*大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科

2. 題材の選定

絵本と音楽とを関連させた先行研究で次のものが挙げられる。

竹内・奥(2007)は、言葉の持つ音楽性について、具体的な作品を挙げながらオノマトペと言葉のリズムが音の表現に及ぼす影響を考察している。オノマトペは言語発達の段階の初期から親しむことができ、言葉の「音」の面白さを味わいながら、絵本の画と融合することによって、様子や音、そしてストーリーを感覚的に理解できる優れた機能を持つ語であると述べている³⁾。

また、菅・上野・貴志(2016)は、音楽を伴った絵本の選択基準として、絵本の「反復」(繰り返し)構造を上げている。この「反復」構造は絵本と音楽の形式に共通する基本的要素であり、両者を結びつける重要な要素であるとしている⁴⁾。

長谷川(2022)は、絵本に含まれるオノマトペがどのような音であるかを想像し、声や楽器、廃材などを使って表現する活動例を実践書に示している。活動が展開しやすいオノマトペの絵本の例として、『ころころころ』(元永定正作/福音館書店1984年)、『ごぶごぶ ごぼごぼ』(駒形克己作/福音館書店1999年)、『おばけのコンサート』(たむらしげる作/福音館書店2000年)などを挙げている⁵⁾。

初回の授業にて、音や音楽をつける絵本の題材について学生同士で話し合い、オノマトペが多く使われていること、ストーリーに反復性があること、音楽で描写しやすいことを重視して、『おばけのコンサート』を選び、「音楽絵本」の創作活動を行うことにし

た。また、この絵本に音や音楽をつけて保育園で発表を行い、子どもたちが見やすいようにプロジェクターで絵本を拡大して投影すること、この取り組みを論文として発表することについて、発行者より承諾を得ている。

3. 創作活動の様子と使用した楽器

『おばけのコンサート』は、7種類のおばけ達が、様々な楽器を家に持ってきて演奏したり、歌ったり踊ったりして楽しむ様子が描かれた作品である。おばけ達が持ってきた楽器で鳴らされる音が色々なオノマトペで表現されており、音への想像力が膨らんでいく。

学生らは、この絵本から想起される音や音楽をどのようにつけるか相談をした結果、既存の鍵盤ハーモニカやリコーダー、打楽器、電子キーボード(YAMAHA PSR-SX600)の多彩な音色を用いるほか、おばけ達が奏でている楽器や場面の様子について、廃材を用いた手作り楽器を製作して鳴らすことにした。その際、筆者は手作り楽器の見た目や飾りつけに力を注ぐのではなく、素材の特徴を捉えながら、どのような音色が奏でられているかを自分達の耳でよく聴いて吟味するよう促した。

以下の表1に、『おばけのコンサート』を題材に、編成や音楽表現の方法についてまとめたものを示す。

今回の実践発表で使用した電子キーボードは、YAMAHA PSR-SX600である。この機種は音色の種類が1,360と豊富で、それぞれの楽器の音色ごとに、実際にその楽器を演奏しているようなニュアンスや音

表1 『おばけのコンサート』の編成および音楽性を表現するために使用した楽器や音楽表現法

編成	語り手(1名)、ピアノ、電子キーボード、鍵盤ハーモニカ、リコーダー、ふくろう笛(図1)、カホン、ウッドブロック、鉄琴、パーランクー、オクタチャイム、手作り楽器3種(図2~図5)
音楽表現の方法	<ul style="list-style-type: none"> ・既存の鉄琴と、電子キーボードに内蔵されている古代のオルガンの音色とハーモニカの音色を用いて、絵本が始まる前にオリジナルの音楽を演奏する(譜例1)。 ・おばけがハーモニカを吹いている場面とバイオリンを奏でている場面、ギターを演奏する場面では、電子キーボードに内蔵されているハーモニカ、バイオリン、スチール弦ギターの音色を用いる。 ・オノマトペでふくろうが鳴っている箇所ではふくろう笛(図1)を吹く。 ・オーボエを奏でている場面では、既存のリコーダーと鍵盤ハーモニカを用いてメロディーを演奏する。 ・ドアをたたく場面(4つの場面)ではカホンをを用いる。絵本に記載されている「トントン」の文字の大きさの違いに従って、強弱やテンポを変える。 ・ガイコツが骨をたたいている場面では手作り楽器2種(図4と図5)を用いて交互に演奏する。 ・家が「グラッ」と揺れる場面では、手作り楽器(図2と図3)を用いて表現する。 ・おひさまが出る場面では、オクタチャイムと電子キーボードのシンセ音を用いて表現する。 ・後奏曲として、絵本が始まる前に演奏した音楽を既存の鉄琴と電子キーボードを用いて再度演奏する。

を表現できる「スーパーアーティキュレーションボイス」機能^{註1)}が搭載されている。この機種を使用することにより、バイオリンが弓を擦って演奏しているニュアンスや、ギターが弦をはじく様子まで表現さ

れ、絵本の世界観がよりイメージしやすくなると考えた。譜例1は筆者が作曲した『おばけのコンサート』の前奏曲である。

譜例1 『おばけのコンサート』の「前奏曲」



以下に絵本に登場する楽器をもとに学生が製作した手作り楽器（抜粋）を示す。

図2は、絵本のストーリーの中で家が「グラッ」と揺れる場面において製作した手作り楽器である。学生

は外に出かけて大きめの石を集め、タッパーの中に入れて音を確かめながら製作していた。石のみだと固い音が強く、納得がいかなかったようで、ビーズも混ぜて自分達の表現したい音を探求していた。



図1 ふくろう笛



図2 手作り楽器①（前から見た形とタッパーの中の様子）



図3は図2の手作り楽器を使用する場面と同様、家が「グラッ」と揺れる様子を表現するために製作したものである。段ボールにストローを貼りつけ、棒を

使って素早く上下に擦って音を出す。図2の手作り楽器と共に鳴らすことで、家が揺れる様子や家の中の物も揺れる音が聴こえてくるように表現される。



図3 手作り楽器②



図4 手作り楽器③



図5 手作り楽器④

図4と図5は、ガイコツが骨たたきをしている場面において製作した手作り楽器である。

図4の手作り楽器の材料で使用した空き箱は、厚みのある頑丈な素材であり、手でその箱をたたくだけでも、太く響きのある音であった。さらに、芯のある音にするために、紙粘土と割り箸を材料としたバチを作り、箱を首からぶら下げながらバチでたたくように工夫をしていた。

図5の手作り楽器は、丸く切り抜いた2枚の段ボールの間にガムテープの芯を挟め、糸で周りを巻いて製作したものである。音を出す工夫として、ガムテープの芯にゴム風船を強く張り、響きのある音になるようにした。

Ⅲ. 実践発表

1. 実践発表の概要

2024年9月4日10:00～10:40に、A保育園の保育室において0歳児クラス～5歳児クラスの園児（42名）を対象に実践発表を行った。プログラム内容は以下の表2の通りである。

表2 プログラム内容

順番	内容
1	合奏『ふしぎなポケット』
2	パネルシアター『くいしんぼうおばけ』
3	音楽絵本『おばけのコンサート』
4	手遊び歌『うさぎ』
5	創作ダンス『おばけなんてないさ』

実践発表では、音楽絵本『おばけのコンサート』の発表だけでなく、手遊び歌や子どもたちも一緒にダンスをするなど、プログラム全体を通して子どもたちが楽しめるよう多様な内容で構成し、実施した。

2. 実践記録

1) 音楽絵本が始まる前

本稿において、学生が実践発表を行った時期は短期大学2年生の9月であり、学生も過去3回の保育現場での実習を経験してきた。発表に向けて、子どもたちに会えることや発表することを楽しみにワクワクしている学生もいれば、人前で発表することに少し緊張した表情を見せる学生もいた。子どもたちは昨年度に鑑賞した『もりのおふろ』や『きよだいなきよだいな』の「音楽絵本」を覚えていたようで、保育者に「お

きな絵本にライオンさんがいたよね」などと話していた。また、楽器がたくさん置かれている方に興味を示し、楽器を指さしたり、イーゼルを見て「絵本やる」とつぶやいたりする姿も見られた。その様子を見て、緊張していた学生も自然と笑顔が溢れるようになった。

2) 音楽絵本『おばけのコンサート』の発表時

音楽絵本『おばけのコンサート』の発表では、絵本をスクリーンに投影して読み聞かせを行った。薄暗い部屋で、普段とは異なる環境での読み聞かせに、筆者は子どもたちが怖がらないかと少し不安も感じていたが、子どもたちはスクリーンに映し出された表紙の絵に興味津々であった。電子キーボードと鉄琴による「前奏曲」が始まり、学生がタイトルを読むと、子どもたちは静かに集中して音楽や語りに耳を傾けていた。この絵本では、ふくろうが「ホーホー」と鳴くシーンが多いため、ふくろう笛を使用してふくろうの鳴き声を再現した。ふくろう笛を吹くと、多くの子どもたちがその様子に興味を示し、演奏する学生も次第に得意げな表情になっていた。また、読み手が再び絵本の読み聞かせを始めると、子どもたちはスクリーンを見つめ、再び話にも集中していた。カホンやウッドブロック、パーランクーなどの打楽器を担当した学生は、練習の段階で「子どもたちの反応を見ながら演奏する」よう指導を受けたため、本番でも子どもたちの様子を見ながら演奏できていた。

そして、子どもたちが特に興味を示したのは、手作り楽器の演奏だった。ガイコツが骨を叩く場面や家が揺れる場面で手作り楽器が使われ、学生たちはそれを子どもたちに見えやすいように手前に持って演奏した。さらに、絵本の登場人物に関連したデザインが施されていたため、子どもたちは視覚的にも興味を引かれているように感じられた。何度も練習を重ねた成果が表れ、学生たちは余裕を持って音楽絵本の発表を行うことができていた。子どもたちは前のめりになって集中し、音楽絵本を楽しむ姿がとても印象的な時間となった。

Ⅳ. 保育者へのアンケートの結果と考察

実践発表の終了後、保育現場の保育者（5名）を対象としてアンケート調査を実施した。実際に学生の実践発表を鑑賞した保育者による意見を収集し、本実践の振り返りとともに考察を行った。

1. 質問項目

音楽絵本『おばけのコンサート』の実践発表に関する質問と発表全体に関する質問を保育者に行った。質問1～6は選択式、質問7は記述式の質問項目とし、選択式の質問回答に際しては、4件法「4（とてもそう思う）3（そう思う）2（あまりそう思わない）1（そう思わない）」とした。質問1と2は子どもたちの

様子に関する質問、質問3～5は学生の発表における表現力に関する質問、質問6と7は保育者自身に関する質問にした。

2. アンケート結果

1) 選択式アンケートの結果

保育者へのアンケート結果は図6の通りである。

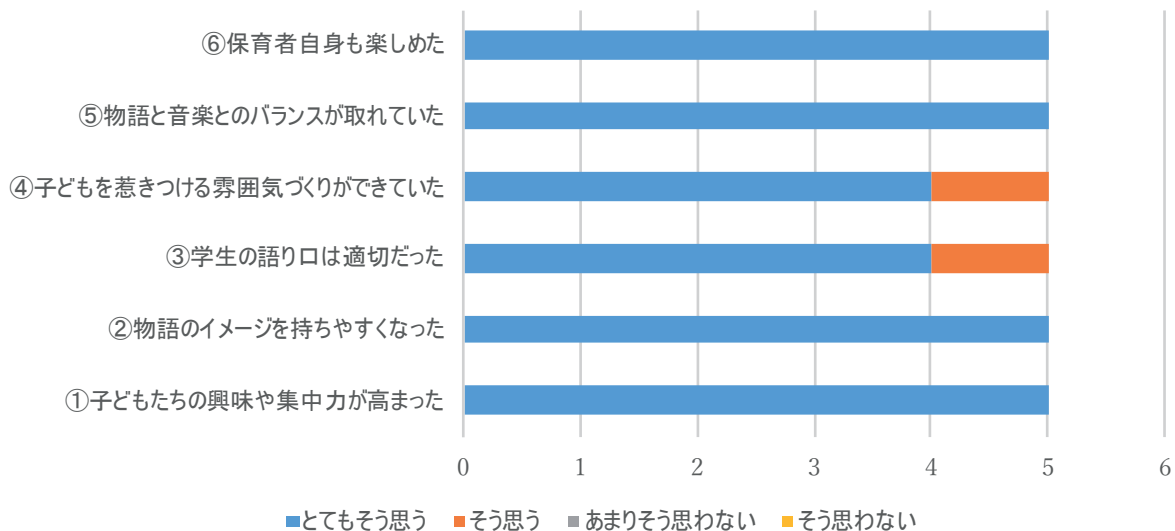


図6 選択式アンケートの結果（保育者）

2) 記述式アンケートの結果

「音楽絵本」の発表に関する記述内容および発表全体に関する記述内容について、以下に抜粋したものを記載する。

〈絵本や子どもたちの姿に関する記述〉

- ・音や音楽のタイミングも絵本のお話と合っていて良かった。
- ・読み聞かせの中に音楽が加わることで物語のイメージが膨らみ、感動した。
- ・子どもたちも夢中で惹きつけられておりとても良かった。
- ・このようなコンサートは私も子どもも経験がなく新鮮な気持ちで楽しむことができた。
- ・音や音楽があることで、0歳児～5歳児まで楽しめていたという印象を受けました。
- ・音楽が加わることで、視覚だけでない楽しさや面白さが生まれ、子どもたちの気持ちがわくわくしたりと期待感を持って見ることができました。

〈発表全体を通して感じたことや改善点などの記述〉

- ・今回は全年齢楽しめるものだったが、乳児向け、幼児向けなども見てみたいと感じた。
- ・子どもの座る位置によっては、スクリーンが見えにくい場所もあったので、見えやすいようになると良いと思いました。
- ・とてもよく工夫されていて素晴らしかったです。保育士に動物の耳だけとか、ちょっと身に付けるものがあるといつもと違う雰囲気で喜ぶますよ。

3. 考察

1) 選択式アンケートの考察

全体的に「とてもそう思う」または「そう思う」という結果がほとんどであることが分かる。

質問1の回答について、保育者全員が「とてもそう思う」と回答した。「音楽絵本」が子どもたちの興味を惹きつけ、物語に入り込むことを促したといえる。質問2についても保育者全員が「とてもそう思う」と回答しており、「音楽絵本」が子どもたちの物語に対する想像力を高める効果があったことが分かる。質問3について、保育者全員が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答しており、学生の語り口（声の抑揚の付け方や話すテンポ）は適切であったことが分かる。質問4に対して、保育者全員が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答している。学生らは、「音楽絵本」の発表において、絵本を読む担当、楽器を鳴らす担当それぞれが子どもたちを惹きつける雰囲気づくりができていたことが分かる。質問5については保育者全員が「とてもそう思う」と回答しており、学生が音楽絵本の読み聞かせにおいて、物語と音楽との調和を考えて、音楽づくりができたことを示している。質問6は保育者全員が「とてもそう思う」と回答したことから、保育者にとっても「音楽絵本」は新鮮で楽しい経験であったことが分かる。

以上のことから、「音楽絵本」の実践発表は、絵本と音楽の相乗効果によって、物語の世界観をより深く描き出し、子どもたちの想像力を高めることができたと考えられる。絵本に音や音楽を取り入れることは、読み聞かせとはまた違う楽しみ方があり、幅広い年齢層の子どもたちの興味関心や期待感をさらに高めることができることが示唆された。

2) 記述式アンケートの考察

保育者の記述から、「音や音楽のタイミングも絵本のお話と合っていて良かった」、「読み聞かせの中に音楽が加わることで物語のイメージが膨らみ、感動した」、「音や音楽があることで、0歳児～5歳児まで楽しめていた」、「音楽が加わることで期待感を持って見ることができた」などの感想が見られた。これらのことは、音や音楽が加わることで、絵本の物語がより豊かになり、聞き手の想像力や期待感を高める効果があること、さらに子どもたちがより楽しみながら物語に入り込むことができた様子がうかがえる。また、今

後の改善点として、「スクリーンが見えにくい場所もあった」という点が挙げられたことから、子ども一人ひとりの視界や環境に配慮する重要性も感じられる。次の発表では、スクリーンの配置や子どもの席の位置を見直し、全員が快適に観られる環境作りを考えることが必要である。また、発表者の装いの工夫にまで意識が向かなかつたので、今後は、子どもたちが普段と異なる雰囲気を楽しめるよう、出来る範囲で工夫をしていきたい。

V. 学生の振り返りシートの内容と考察

1. 質問項目

音楽絵本『おばけのコンサート』の実践発表に関する質問を学生に行った。質問1～5は選択式であり、質問回答に際しては、4件法「4（とてもそう思う）3（そう思う）2（あまりそう思わない）1（そう思わない）」とした。質問1と2は子どもたちの様子に関する質問、質問3～5は学生の発表における表現力に関する質問にした。また、選択式の質問用紙に加えて、振り返りシートも授業後に提出してもらった。振り返りシートは、学生自身の言葉で考え、記すことができるよう自由記述形式とした。振り返りシートの質問は、「音楽絵本『おばけのコンサート』の準備・練習・発表をとおして、あなた自身が学んだことを述べなさい」とした。

2. アンケート結果

1) 選択式アンケートの結果

学生へのアンケート結果は図7の通りである。

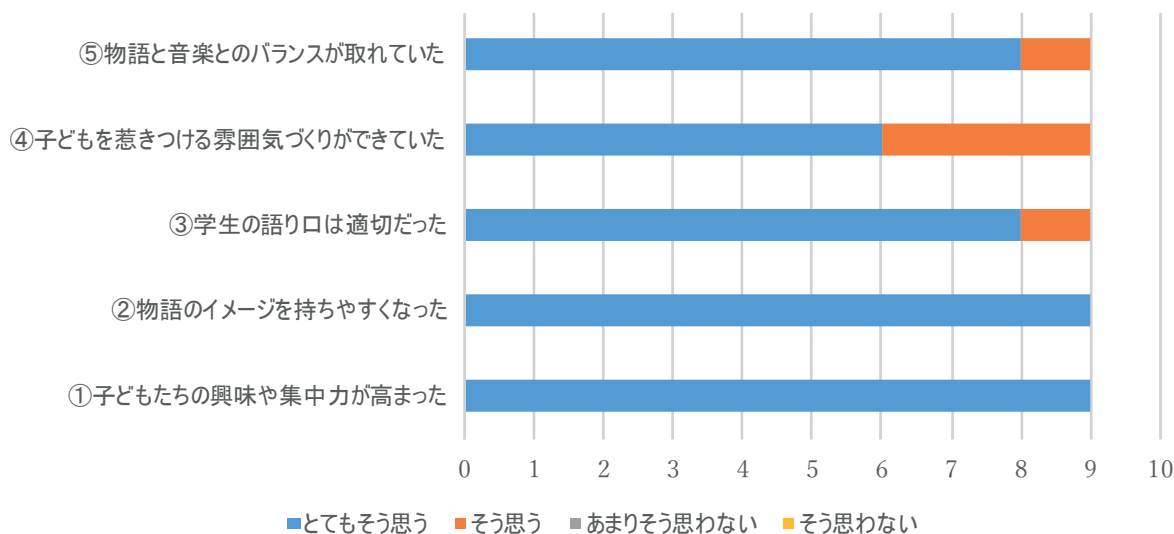


図7 選択式アンケートの結果（学生）

2) 振り返りシートの結果

ここでは、振り返りシートの「音楽絵本」に関する学生の記述内容について、以下に抜粋したものを記載する。また、学生の記述内容において、誤字脱字や文章表現として不正確な記述が見られた回答について

は、もとの文章から前後の文脈を判断し、筆者がその内容を訂正した。なお、複数の学生で記述内容が同様の意味であると判断できる回答については、筆者がより具体的であると思われる学生の回答を採用した。以下、文章中の下線は筆者による。

「音楽絵本」に関する記述

- ・音楽で絵本の世界を表現することで、読み聞かせだけの場合よりも、子どもたちの心に深く残ると感じました。その理由は、音を通して物語がよりリアルに感じられ、自分も絵本の世界に入り込んでいるような気持ちになれるからです。私自身も、絵本の中に引き込まれている感覚を味わうことができました。
- ・音楽を加えて絵本の世界に入り込めるように工夫することで、子どもたちに内容がより伝わりやすくなると感じました。
- ・登場人物に合わせた音を鳴らすことで視覚だけではなく聴覚も使って絵本の世界に入り込めることを学んだ。
- ・「音楽絵本」は聞き手の感性を刺激して、絵本よりも臨場感が高まるような経験になると思った。
- ・絵本に音楽を取り入れて子どもたちに発表するには、多くの準備が必要で、一人では難しいこともあり大変でしたが、いつもとは違う雰囲気での読み聞かせによって、子どもたちの絵本への集中力がより高まったと感じました。
- ・おばけが登場する場面に合う楽器の音を想像し、楽器づくりにも挑戦しました。一人ひとりの工夫が異なり、音もそれぞれ違って面白かったです。練習を重ねるたびに最高の『おばけのコンサート』ができたので、とても満足しています。
- ・回数を重ねるごとに音や音楽が形になり、完成に近づいていく達成感を味わうことができ嬉しかったです。
- ・絵本に音楽をつけるために、教材研究を行い、どの場面でどのような音を加えて演奏すると良いかを考えたことで、絵本を深く読み解くことにもつながりました。
- ・絵本に登場する楽器を本物で用意できない中で、どのように音を表現するかを工夫することが大切だと学びました。
- ・「音楽絵本」の発表の中で、子どもたちが手作り楽器にも興味を示してくれたのが嬉しかったです。絵本に音楽をつけることで、子どもたちは物語だけでなく音も楽しむことができると感じました。

3. 考察

1) 選択式アンケートの考察

全体的に「とてもそう思う」または「そう思う」という結果がほとんどであることが分かる。

質問1および質問2の回答について、学生全員が「とてもそう思う」と回答した。「音楽絵本」が子どもたちの興味や集中力を高め、物語のイメージをよりわかりやすく伝えるのに効果的だったといえる。質問3については、学生全員が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答しており、適切な語り口（声の抑揚や話すテンポ）を意識して絵本を進行できたことがうかがえる。練習では、語り手担当の学生も音楽担当の学生も、すぐに次のページへ進んでしまう傾向が見られたが、子どもたちが音の余韻や物語の世界観を味わう時間を想定し、間の取り方を工夫するよう指導した。その結果、練習段階から子どもたちの表情や反応を意識する姿勢が見られ、本番にもその成果が反映されたといえる。質問4に対して、学生全員が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答していることから、子どもを惹きつける雰囲気づくりが出来ていたことが分かる。しかし、回答が「とてもそう思う」と「そう思う」に分かれたことから、さらに工夫の余地があるとも考えられる。子どもたちがより一層引き込まれるような表現方法や演出の仕方を再検討することで、全員が「とてもそう思う」と感じる雰囲気づくりが可能になるかもしれない。質問5については学生全員が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答しており、物語と音楽との調和を考えて、音楽づくりができた学生が実感できたことが分かる。

以上のことから、「音楽絵本」の実践発表について、学生自身が高く評価していることが分かる。子どもたちの興味や集中力を引き出し、物語のイメージをわかりやすく伝える点において、絵本に音や音楽を加えることは効果的であったことが示されている。また、学生が自分たちの語り方や間の取り方に対する改善を図ったことで、子どもたちの反応をよりよく観察しながら進行を工夫する意識が高まり、子どもたちが物語に引き込まれる雰囲気作りにつながったと考えられる。

さらに、この「音楽絵本」の準備を通して、学生が物語と音楽の調和を意識しながら音楽づくりに取り組むことができたことも、重要な学びとなったことが分かる。この経験を活かし、学生は音楽を用いた保育活動の視野を広げるきっかけとなったといえる。

2) 振り返りシートの考察

学生の振り返りから、「絵本に音や音楽をつけることで、より絵本の世界に入り込める」という記述が多く見られた。学生らが感じたように、絵本のストーリーや登場人物に合わせた音や音楽をつけることは、臨場感を高め、子どもたちが物語の世界により深く入り込んで内容を直感的に理解しやすくなるという効果があると考えられる。また、「どの場面でどのような音を加えて演奏すると良いかを考えたことで、絵本を深く読み解くことにつながった」という記述から、学生らが音や音楽をつける過程において、場面に合った音や表現を考えることが絵本の理解をさらに深める手助けとなることが読み取れる。

そして、手作り楽器に関する記述として、「一人ひとりの楽器づくりの工夫が異なり、それぞれの音が面白かった」、「どのように音を表現するかを工夫することが大切だと学んだ」、「子どもたちが手作り楽器に興味を示してくれた」という内容が見られた。本物の楽器が用意できない場合にも学生らが工夫して音を考え表現することで、思考力や創意工夫の力も養われることがうかがえる。発表の際に、子どもたちは生の楽器や手作り楽器にも興味を持ち、物語だけでなく音そのものも楽しむ姿が見られたことから、絵本の進行に合わせて生の楽器を鳴らすことは、子どもたちの感性や興味を引き出す大きな役割を果たしていることがうかがえる。また、複数の学生から、「練習を重ねるたびに完成に近づき、達成感を味わえた」という記述が見られたことから、「音楽絵本」の準備と発表は、学生らにとって、試行錯誤や練習を重ねるプロセスを通して自己達成感や満足感を高める経験となっていることが分かる。このような経験が、今後においても学生らの意欲や自己成長を促すきっかけになると考えられる。

VI. 総合考察

本稿は、昨年度に引き続き音楽と絵本を融合した創作活動を授業で行い、それを保育園にて実践発表することを通して、「音楽絵本」の可能性や効果について検討することを目的とした。

子どもたちの姿や保育者からのアンケート結果より、「音楽絵本」は視覚と聴覚に訴えかけ、子どもたちの興味を引き出し、物語への集中力や想像力を高める効果があることが示唆された。音や音楽を交えた読み聞かせは、子どもたちが物語の世界に深く入り込む

ために有効な手段であると考えられる。また、保育者全員が「音楽絵本」の読み聞かせをとても楽しめたと回答している点から、「音楽絵本」の取り組みは、子どもたちの想像力を育み、物語に対する興味を高めるだけでなく、保育者にとっても新鮮で楽しい経験であったことが確認できた。

そして、「絵本に音楽をつけることによって、子どもにとって絵本の物語のイメージを持ちやすくなったと思いますか？」という質問に対して、保育者と学生全員が「とてもそう思う」と回答したことから、「音楽絵本」は物語の世界観を深く描き出し、子どもたちの想像力を豊かに育む可能性を持っていることが示唆された。さらに、物語に音楽が加わることで、子どもたちがストーリーの情景や感情をより深く感じ取り、感受性も育まれることも期待される。

また、学生たちが練習を重ねる中で、声の抑揚や話すテンポ、間の取り方、音楽と物語の調和を意識し、子どもたちの反応を見ながら表現を工夫できるようになったことは、発表の質を高めることに繋がった。絵本の読み手と楽器演奏者が連携して、子どもたちを惹きつける雰囲気をつくりあげることができた点も、保育者としての表現力や観察力、コミュニケーション能力の向上に効果的であったといえる。さらに、今年度は「音楽絵本」に数種類の手作り楽器を導入したことで、学生たちは製作過程を通じて、どのような素材を組み合わせればイメージした音を生み出せるかを試行錯誤しながら考える機会を得た。その結果、音に対する感受性が一層高まったと思われる。そして、発表で手作り楽器から奏でられる音を子どもたちが聴くことで、子どもたちの手作り楽器への興味関心を引き出す効果もあったと考えられる。

以上のことから、「音楽絵本」の取り組みは、子どもたちと保育者、そして学生にとっても有意義で魅力的な経験であり、子どもたちの想像力や集中力を引き出し、保育現場における新たなアプローチとしての可能性を持っていると考えられる。

今回、悔やまれる点として、子どもたちが、実際に楽器に触れて、素材や形を確かめたり、音の響きを味わえたりする機会を設けることができなかったことである。学生が製作した手作り楽器に子どもたちが興味を示していたにも関わらず、実際に触れて鳴らす時間の確保ができなかったため、今後は、保育現場にて子どもたちが手作り楽器を体験できる活動も積極的に

行っていきたい。また、今回の音楽創作にあたって、絵本の物語と音・音楽のバランスを取る難しさも改めて感じられた。物語を邪魔しすぎないように音や音楽を付けるためには、絵本を深く読み解き、どの箇所に音を入れるか、どのような音や音楽にすれば登場人物の様子や物語の情景をより豊かに表現できるかを、入念に考える必要がある。学生たちが主体的に意見を出し合い、音を確かめ合い、音楽を試行錯誤して作り上げていくためには、時間と労力を要することを筆者も改めて実感した。限られた授業時間内で充実した活動ができるよう、計画的な進行とスムーズな役割分担を教員として支援していきたい。

これらを踏まえ、今後も絵本を活用した音楽創りにおける指導法や実践方法を見直しながら、取り組みを続けていきたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり、発表の場の提供とアンケート調査の実施に快くご協力いただきましたA保育園の先生方に厚く御礼を申し上げ、感謝の意を表します。

注

注1) スーパーアーティキュレーションボイスとは、鍵盤のタッチの強さを変えることで、演奏に繊細な表情をつけることができる機能である。

参考文献/引用文献

- 1) 文部科学省 (2018)『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、p.238。
- 2) 同上
- 3) 竹内唯・奥忍 (2007)「絵本の中の音楽－画・言葉・テーマとの関連に着眼して－」『岡山大学教育実践総合センター紀要』第7巻、p.31。
- 4) 菅道子・上野智子・貴志明日香 (2016)「幼小『接続期』カリキュラムを視野に入れた絵本を用いた音楽活動－絵本『ねこのビート だいすきなしろいくつ』を例として－」『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』第67集、pp.177-178。
- 5) 塩崎みづほ・長谷川恭子・小口偉 (2022)『遊んで育て！表現の力－保育で使える活動例と指導法－』推敲舎、pp.71-76。

